

茶臼山高原及び周辺地域の植物雑記

廣江 伸作 *

「茶臼山の植物相」について平成 23 年度より調査を開始して 2 年が経過した。平成 24 年度も、長野県内で、あるいは地域性において、新しい発見があったので報告しておきたい。なお、今回は、茶臼山近隣の根羽村月瀬や売木村ブナノネにおいて県絶滅危惧種の新産地を見つけているので合わせて報告しておきたい。

1 オオフトイ (カヤツリグサ科)

Scirpus lacustris

茶臼山湖の浅い水中に生えている大型の多年草である。茎は粉緑色で円く、高さは 2 メートルを超すほどにもなる。はじめはフトイと思っていたものであるが、愛知県豊橋市の植物研究者から、「フトイにはオオフトイもあると聞いているけどどちらだろうか。」と疑問を投げかけてもらったことが詳しく調べてみるきっかけとなった。

さっそく図鑑で調べてみると、フトイは柱頭が 2 分岐、これに対しオオフトイの方は 3 分岐とあった。そこで柱頭部分を詳しく観察してみると、3 分岐していることがわかったので、オオフトイと認識するに至ったものである。

長野県植物誌では、オオフトイは掲載されてなく、フトイだけが掲載されている。後日、下伊那の植物に詳しい浅野一男氏に標本を見てもらったが、「少なくとも下伊那地方では初めてみるめずらしいものである。」とのことであった。



写真1 オオフトイ

県内の分布状況がわかるきっかけになればと思っている。

2 ナガサキオトギリ (オトギリソウ科)

Hypericum kiusianum var. *kiusianum*

当初、茶臼山でのオトギリソウ科の種については、オトギリソウとサワオトギリと思っていた。しかし、サワオトギリと思ってきたものについては、なるほど葉全体に明点が散らばっていてサワオトギリと思える要件を備えているけれども、植物体は全体として小型で、茎もひ弱な感じで、葉も細長く小さいことからサワオトギリにしてはほとんどなく違うものを感じていた。

折りしも、浅野一男氏が茶臼山に来られる機会があり標本をみてもらったが、その場での即答はなかった。しかし、しばらく日数を置いてから再び返事をいただいたところ、結果はナガサキオトギリとのことであり、大変驚いた。

すぐに、ネットや植物図鑑でナガサキオトギリについていろいろ検索してみると、サワオトギリとは葉の形に違いが認められるものの、その差は微妙で、なかなか分かりにくいものであることがわかってきた。さらに、従来、四国・九州地域に分布している植物とされてきたが、静岡県や神奈川県でも見

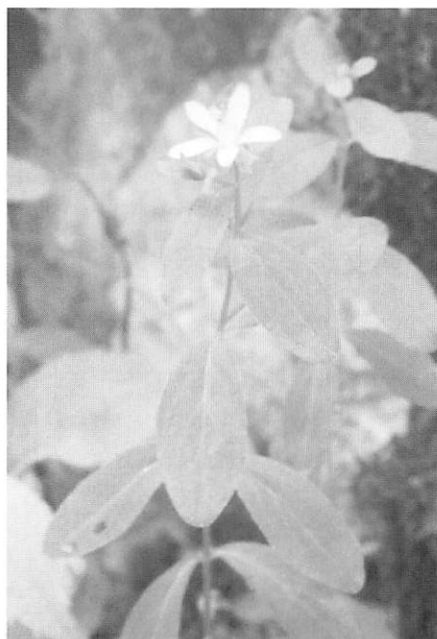


写真2 ナガサキオトギリ

* 廣江 伸作 長野県下伊那郡根羽村 2171-1 村営住宅 3 号

つかってきていることなどがわかってきた。

何しろ長野県植物誌にも掲載されていない植物なので、より慎重に見定めていきたいと思い、静岡県や神奈川県でのナガサキオトギリの標本をもつ国立科学博物館の門田裕一氏にも標本同定(根羽村の標本3、愛知県豊根村の標本1)のお願いをした。

その結果、「現段階での定説と思われるものに従って、次のように区別し、ナガサキオトギリで良いと思う。」と回答をいただいた。

A 蒴果は卵状球形、葉は倒卵形、茎は上部で分枝して枝は広角的に伸びる。分布域は日本海側。・・・・・・サワオトギリ

A 蒴果は長卵状球形(やや円柱状になる)、葉は狭楕円形、茎は下部から分枝して枝は鋭角的に伸びる。分布域はソハヤキ地域。・・・・・・ナガサキオトギリ

さらに各々の形質に関するコメントも付加してもらっている。

1. 明点、黒点、黒腺の有無で両者を区別するのは難しい。長野県植物誌にあるように、長野県産個体では葉の下面に黒点があることは間違いない。しかし、これは長野県産個体に限ったことではない。また南信には明点がはっきり見られるものもある。
2. 茎の分枝については、四国・九州のものに限れば、極めて明瞭な区別点となる。しかし、分布の東限に当たる静岡県や神奈川県では分枝が少ないものが普通で、この点だけでは両者を区別できない。
3. 葉形も中国地方のものはやや長楕円状になり区別に困るが、サワオトギリが日本海側、ナガサキオトギリが太平洋側という棲み分けは良い着眼点と思う。日本海側に分布する広葉型の植物の多くは鳥取県辺りから、「広葉」的な性質を失う傾向があるので、この場合もそれが当てはまるように思う。

今後、県内の他の地域でもナガサキオトギリが見られるかどうか、あるとすればどのあたりに分布するものなのか、諸々のことが分かるきっかけになればと思っている。

3 ヒロハテンナンショウ(サトイモ科)

Arisaema amurense subsp. *robustum*

昨年、長野県植物研究会での植物観察会は、戸隠

荒倉山であったが、その際、ヒロハテンナンショウなどのサトイモ科テンナンショウ属の植物についても数多く観察することができた。

その経験を基に、茶臼山でも、もっと丹念にテンナンショウ属の植物を探してみたところ、思いがけなくも、根羽村サイドの通称「学習の森」で、花序が葉よりも下についているヒロハテンナンショウを見つめることができた。

標本を採取して、植物体を詳しく観察してみると、花序が葉の下にあったこと以外にも、花序の柄が短



写真3 ヒロハテンナンショウ



写真4 チシマオドリコソウ

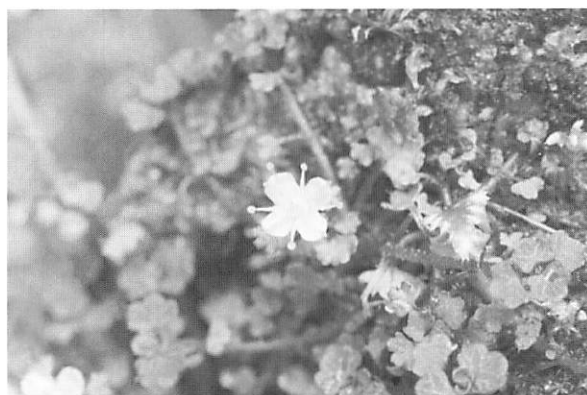


写真5 キバナハナネコノメ

かったこと、仏炎苞に著しく隆起する白色の縦条があったこと、小葉の数が5枚あったことなど、ヒロハテンナンショウの特徴をいくつか確認できた。

ヒロハテンナンショウは日本海側の植物と聞いているので、日本海より遙か離れた茶臼山にも生育していることを思うと感無量であった。長野県植物誌をみると県南部での生育記載はないことから、恐らくこの地域では初めての発見になったものと思っている。

なお、標本同定の方は、後日、中山洸氏にしている。

4 チシマオドリコソウ(シソ科)

Galeopsis bifida

チシマオドリコソウとの出会いは、豊橋市の植物愛好家の方からチシマオドリコソウの写真を見せてもらったことに始まる。めずらしい植物なので、さっそく生育場所(売木村ブナノネ)に案内してもらったが、植物体全体としての印象は、よく見てきたオドリコソウを一回り小さくしたような感じであった。

長野県植物誌によると、北海道や外国では比較的普通の植物だが、本州では長野県と栃木県に隔離分布するとある。分布は、県の北部・中部・東部の山地に稀となっており、南部での記載はない。長野県版レッドリストによると、絶滅危惧Ⅱ類の指定となっている。

また、生育場所には、「貴重種、チシマオドリコソウの生育場所、刈り取ったりしないように」と立て札が立てられていた。貴重な植物種を守っていくために大切な取り組みがなされていると思った。

なお、標本の同定は、後日、浅野一男氏にしている。

5 キバナハナネコノメ(ユキノシタ科)

Chrysosplenium album var. *flavum*

4月下旬、根羽村月瀬で沢歩きをしていると、キバナハナネコノメが群生しているのを見つけたことができた。初めて見るものであったが、豊橋市の植物愛好家の方から、キバナハナネコノメやこれとよく似たトウノウネコノメの画像を送信してもらっていたのでそれとなく見当をつけることができた。

形態的特徴をあげると、茎葉が対生、萼裂片が花時直立、そして萼裂片が花時に黄色となることなどである。萼片が直立しているところは、トウノウネコノメとよく似ているが、キバナハナネコノメの方

は直立といっても少し開いた感じになっているので区別できている。

長野県植物誌で分布状況を見ると、元来本州の東海地方に産するもので、長野県では南部だけで見られるものとなっている。そのため貴重で、長野県版レッドリストでは絶滅危惧ⅠA類に掲げられている。

標本同定の方は、後日、浅野一男氏にお願いをしたが、より確実を期すため、命名者の若林三千男氏にも転送の上、みてもらっている。

謝辞

今年度もささやかながらこのような形で報告ができましたのも、多くの先生方のお力をいただくことができたお陰の賜物であります。この誌面を借りて厚くお礼申しあげます。

追記1 標本の採集地と標本の送付先

オオフトイ・・・長野県根羽村茶臼山湖、長野県環境保全研究所

ナガサキオトギリ・・・長野県根羽村茶臼山と愛知県豊根村、国立科学博物館と長野県環境保全研究所
ヒロハテンナンショウ・長野県根羽村茶臼山、長野県環境保全研究所

チシマオドリコソウ・・・長野県売木村ブナノネ、長野県環境保全研究所

キバナハナネコノメ・・・長野県根羽村月瀬、長野県環境保全研究所

追記2 参考文献

売木村誌編集委員会(1993) 売木村誌上巻 201-204

佐竹義輔他(1981) 日本の野生植物 (Ⅰ)～(Ⅲ) 平凡社

清水建美監修(1997) 長野県植物誌 信濃毎日新聞社 483-490 641 956 1202

長野県(2002) 長野県版レッドデータブック(維管束植物編) 77 203

根羽村誌編集委員会(1993) 根羽村誌上巻

牧野富太郎原著(2008) 新牧野日本植物図鑑 北隆館 999

邑田仁(2011) 日本のテンナンショウ 北隆館 110-112